

『教行信証』に関する調査報告 (2015年度)

杉岡孝紀 (龍谷大学農学部教授)

川添泰信 (龍谷大学文学部教授)

玉木興慈 (龍谷大学短期大学部教授)

高田文英 (龍谷大学文学准教授)

目次

1. 『教行信証』の書誌的・文献学的研究
2. 〔文明本〕の書誌情報
3. 〔浄興寺本〕の調査報告
4. 報告のまとめと今後の課題

1. 『教行信証』の書誌的・文献学的研究

サブユニット1は、親鸞の主著『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』と略称）六巻を中心に据えながら、親鸞浄土教を総合的に研究することを主題としている。親鸞の浄土教の研究については、伝統的な宗学研究はいうまでもなく、近代以降は歴史学・哲学・文学などさまざま領域から研究がなされ多様で豊富な業績が蓄積されてきた。私たちはそうした研究を踏まえながら、大きく二つの角度から五年間の研究を進めている。一つは、書誌的・文献学的研究であり、二つは思想的・教義的研究である。当然のことながら、両者は不可分の研究であるため、二つの研究を同時平行的に進めていくことになるが、あらゆる人文学研究において、その基礎として文献学的研究が重要であることは言うまでもなく、私たちが『教行信証』の書誌についてまずは目を向けることにした。

私たちが特に書誌的・文献学的研究の対象としたのは、龍谷大学大宮図書館写字台文庫所蔵（明厳寺旧蔵本）の『教行信証』〔文明本〕六巻八冊本である。この〔文明本〕を底本として、その流伝と資料的位置づけを探究するために今年度は資料の調査を開始することにした。ただし本資料は、本学の貴重資料データベースにも公開されておらず、先行研究も極めて少ない。

2. 〔文明本〕の書誌情報

〔文明本〕の書誌情報は以下の通りである。

（1）基本情報

冊数	八冊本
紙質	雁皮と楮の混合紙（斐交楮紙）
書写年代	室町期文明二年（1470）頃書写
字数	6行×17字

（2）奥書

教巻

本云寛元五年二月五日以善信聖人御真筆秘

本加書写校合訖文義字訓等重委註了 隠倫尊蓮六十六歳今年聖人七十五歳也
化巻末

→「今此教行証者」で始まる高田慶長本等に書かれる奥書を省略して記載

なお、先行研究では日野環氏が「『教行信証』（親鸞撰述）の「文明古寫本」について」（『印度学仏教学研究』第14巻第2号、1966年）の中で、〔文明本〕の特徴を挙げて、「総序」と「別序」に「愚禿釋親鸞述」なる撰号があったこと、「標挙と標列とが二分して置かれたことは宗祖の「真筆本」に於てはその如何なる段階においてもかつてなかった」点を指摘している。さらに、〔文明本〕奥書には「正應四年」（1291年）に開版され

たという記載があることから、その奥書は正應四年開版本等複数のもを使って作成されたと推測される。また重見一行氏の研究に従うと、本書は文明二年（1470年）に書写された尊蓮書写本（親鸞75歳時）の系統の本であると考えられる。その理由は、六卷八冊本という体裁にあり、六冊本が「信巻」と「化巻」を分冊した存覚本系統から八冊へと改整されたものと推定されるからである（重見一行『教行信証の研究—その文献学的考察—』法藏館、1981年、85-86頁）。しかし残念ながら、〔存覚本〕には「化巻」が欠落しており、奥書を窺うことが難しく、したがって写本の流伝をみていくことは困難である。

こうした点を踏まえて、私たちは比較的、〔存覚本〕に近い〔西本願寺本〕の他に、〔尊蓮本〕や〔浄興寺本〕などを基にして、〔文明本〕の位置づけを探ることにした。これによって、〔文明本〕の独自性が確認され、さらに『教行信証』が数多く書写された、その時代における〔文明本〕の特殊性が鮮明になるものと考えられることができる。

上記の方向性のなかで、初年度に調査並びに収集した資料は、新潟県浄興寺蔵室町初期書写本、大谷大学蔵延文五年本・暦応本系統・文安六年本・室町末期本、中山寺蔵の二本（性海の名があるものとないもの）、さらに岸部氏（奈良県）所有の延文五年本（「証巻」のみ）である。この中、〔存蓮本〕の祖型と考えられる〔浄興寺本〕（新潟市上越高田）の調査結果（2016年8月25日）を報告することにする。

3. 〔浄興寺本〕の調査報告

（1）書誌の基本情報

冊数 八冊本
紙質 斐交楮紙、楮紙
書写年代 浄興寺住職藝範が応永年間、巧如時代に、京都にて書写と伝わる
→ 応永年間（1394-1427）なので室町初期、文明本よりも早い。

「総序」・「教巻」

枚数 7枚
字数 8行×17字

「行巻」

枚数 49枚+白紙1枚
字数 9行×17字
奥書 「歡喜踊躍山 / 第廿一代釋乘善
安政四年乙未年十一月 修復之」 → この奥書は各巻末に書かれる

「信巻」本

枚数 31枚
字数 8行×17字（最初の1ページ）

10行×17字（2ページ目）

9行×17字（上記以外）

奥書 「信濃國^{みのち}水内郡太田庄下長沼 / 浄興寺之常住也忝親鸞上人
御作雖然藝範為學文應永 / 中本願寺居住巧如上人被受傳
是當寺秘書他人不可見物也」

「信卷」末

枚数 41枚

字数 9行×17字

奥書 「信濃國^{みのち}水内郡太田庄下長沼 / 浄興寺之常住也此本應永
年中藝範在京之時本願寺 / 住持自巧如上人給處之本也

「証卷」

枚数 22枚+白紙1枚

字数 9行×17字

奥書 信卷末と同じ

「真仏土卷」

枚数 28枚+白紙2枚

字数 9行×17字

「化卷」本

枚数 41枚

字数 9行×17字

「化卷」末

枚数 39枚

字数 9行×17字

奥書 「今此教行証者祖師親鸞上人之選述也立 / 章於六篇調卷於六軸皆引經論真文
各備往生潤色誠是真宗紹隆之鴻基實教 / 流布之淵源末世相応之目足即往安
樂之指南也」

この奥書の元は高田慶長本等に書かれるものであり、全文は以下の通りである。

今此教行証者、祖師親鸞法師選述也。立章於六扁、調卷於六軸。皆引經論真文、各備
往生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基、實教流布之淵源。末世相応之目足、即往安樂之指南
也。而去弘安六曆歲次癸未春、癸未春二月二日、彼親鸞自筆本一部六卷、從先師性
信法師所命相伝畢。為報佛恩、欲企開板於當時、伝弘通於遐代之刻、有度々夢想之告

矣。于時正応第三天歳次庚寅冬臘月十八日夜寅尅，夢云，當副將軍相州太守平朝臣乳父平左金吾禪門法名果円，屈請七口禪侶。被書写大般若經，彼人数内被加於性海，而奉書写真文畢。爰白馬一疋金錢一裏令布施之覺，而夢惺畢。同四年正月八日夜，夢云，當相州息男年齡十二三許童子來，而令正坐於性海膝上覺而惺畢。同廿四日夜夢云先師性信法師化現，而云，教行証開板之時者，奉觸子細於平左金吾禪門，可彫刻也。言已乃去覺，而夢惺畢。同二月十二日夜，夢云，有二人僧，而持五葉貞松一本松子一箇來，與於性海覺，而夢惺畢。依上來夢想，倩案事起，偏淨教感応之先兆，冥衆証誠之嘉瑞也。若爾者，機縁時至弘通成就者歟仍，奉觸子細於金吾禪門，即既蒙聽許而所令開板也。庶幾，後生勿令加減於字点矣。

本云，于時正応四年五月始之，同八月上旬終功畢。

また，〔文明本〕にも「化卷」末に同じ内容の奥書を書いているが，違う省略の仕方をしている。

今此教行証者，祖師親鸞法師選述也。立章於六扁，調卷於六軸。皆引經論真文，各備往生潤色，誠是真宗紹隆之鴻基，實教流布之淵源。末世相応之目足，即往安樂之指南也。而去弘安六曆歳次癸未春。

于時正応四年五月始之，同八月上旬終功畢。

(以下文明本オリジナル)

文明二年庚寅九月上旬，於河州書写畢。雖惡筆，為仏法興隆結縁値遇，如形馳筆後見嘲千悔々々雖有文字不審如本写畢

「化卷」末の奥書は〔文明本〕にも書かれており，正応四年の性海の奥書の一部であると考えられる。ただし，〔文明本〕とは省略の仕方が異なり，若干情報量が少なくなっている。

(2) 題目・撰号・標挙の位置関係

〔文明本〕

「総序・教卷」

- ・ 題目→撰号→総序本文→標列
- 教卷の題目→撰号→標挙・細註→教卷本文

顯淨土眞實教行證文類序

愚禿釋親鸞述

総序本文

標列 (顯眞實教一，…顯化身土六)

顯淨土眞實教文類一

愚禿釋親鸞集

大無量壽經 眞實之經淨土眞宗

教卷本文

顯淨土真實教文類一

「行卷」・「信卷」

- ・ 題目→標挙→撰号

顯淨土真實行文類二

諸佛稱名之願
愚禿釋親鸞集

淨土真實之行撰択本願之行

「他卷」

- ・ 題目→撰号→標挙

顯淨土真實證文類四

愚禿釋親鸞集

必至滅度之願 難思議往生

[浄興寺本] (※は〔文明本〕と異なる部分を示す)

「総序」・「教卷」

- ・ 題目の次行, 「総序」本文の前に『大阿弥陀経』と『平等覚経』が書かれている
- ・ 「教卷」の標挙。標列が教卷の前と末尾の二ヶ所にある。

顯淨土真實教行證文類序

大阿弥陀経 支謙三蔵譯 ※

平等覚経 帛延三蔵譯 ※

総序本文

大無量壽経 真實之経浄土真宗 ※

標列

顯淨土真實教文類一 愚禿釋親鸞集

教卷本文

顯淨土真實教文類一

大無量壽経 真實之経浄土真宗 ※

標列 ※

「他卷」

- ・ 題目→撰号→標挙・細註の順

顯淨土真實行文類二

愚禿釋親鸞集

諸佛稱名之願 淨土真實之行選擇本願之行

4. 報告のまとめと今後の課題

以上の調査結果から、〔浄興寺本〕の特徴として次の点に注意される。すなわち、〔浄興寺本〕は〔存蓮本〕と同じく「総序」・「教巻」の題目・撰号・標挙が変則的であるが、他巻は整っている。また〔文明本〕は「総序」・「教巻」部分も題目→撰号→標挙となっており整っているが、「行巻」と「信巻」は題目→標挙→撰号となるなど、巻によって異なっている。「総序」・「教巻」については〔文明本〕の方が、他巻については〔浄興寺本〕の方が整った形をとっていると言える。

次年度以降は、〔浄興寺本〕以外に収集した写本と〔浄興寺本〕との対校を行うことによって、〔文明本〕の独自性をより明確にしていきたいと考えている。

なお、本報告は世界仏教文化研究センターとの共催で行った第1回研究会（2015年10月15日（木）17時～19時 於清風館3階）での調査報告を基に作成したものである。